

鹿児島県立短期大学 人文学会論集
「人文」第37号 2013年8月31日発行 抜刷

意見表明発話における「覚得」「感覚」の機能の分析

(Comparing the Functions of *Juede* and *Ganjue* in Opinion Statements)

楊

YANG

虹

Hong

意見表明発話における「覚得」「感覚」の機能の分析

楊 虹

1. はじめに

1.1 語気、モダリティと語用標識

私たちがいる情報または物事に対する自らの意見、評価等を相手に伝える際に、使用する言語表現によって、その伝える内容に対する自らの立場やとらえ方、さらに聞き手に対する態度も異なって伝わる。情報や意見等は発話の内容的な部分で命題であり、前述の内容に対するとらえ方や態度の伝達はモダリティである。相互行為における発話はこの命題とモダリティの二つから成り立つ。中国語では、従来「語気」といわれるのはこのモダリティの部分である。

中国語のモダリティのとらえ方には、狭義のとらえ方と広義のとらえ方の2つがあり(彭 2012)、本研究では広義のモダリティの立場をとる。狭義の立場からモダリティを分類し、整理した于(1999)は、品詞および命題とモダリティ構造の関係を分類した結果、モダリティに関わるのは主に助動詞、副詞、接続詞、語気助詞であり、名詞、動詞、数量詞等は主に命題に関わるもので、モダリティに関わらないと指摘している。井上(2012)もモダリティの分類を、1.感動詞、2.副詞、3.助動詞、4.終助詞・間投助詞の四つとしており、動詞については言及していない。

一方で、彭(2012)は、広義のモダリティのとらえ方から、モダリティ表現を動詞(助動詞、一般動詞)、副詞、助詞、語気詞と分類している。本研究で取り上げる「覚得」¹「感覚」は、命題事実の真偽性に関わる主観的判断を示す「命題モダリティ」のうち、認識性を示す「知覚」機能を持つものに分類される。ただし、彭(2012)では、「覚得」のほか、「認為」、「相信」、「想必」、「想」が同じく知覚機能を持つモダリティに分類されているが、「感覚」については言及されていない。また、彭(2012)はモダリティの分類を主な目的としており、個々のモダリティ表現の働きについては例示にとどまり、詳しくは分析していない。

方(2005)は、証拠性・認識動詞(epistemic and evidential verbs)として、体験、認識、知識、評価を表す動詞の語用標識への文法化を論じ、なかでも「覚得(覚着)/想/看/感覚」などの評価を表す動詞の文法化が最も顕著であると指摘している。方(2005)は、これらの動詞が文末に現れる場合、動詞本来の語意がなくなり、話し手の「断定+立場・視点」を表すだけであると指摘している。方(2005)は、談話標識は談話を構築する役割を果たすもので、語用標識は談話の構築に関わらず、命題に対する話し手の態度に関わるものと両者を区別している。方(2005)の「覚得」「感覚」等の語用標識への文法化の指摘は示唆に富んだものである。ただし、使用される例文は自然会話の文字化資料とはいえ、提示された例文は前後の文脈がない単独の文にとどまるため、

¹ 本稿では、会話例は中国語で使われている「簡体字」を用いるが、それ以外では日本語で通用する漢字を用いる。

「覚得」「感覚」等が談話の構築に全く関わらないのかどうかといった点については、疑問が残る²。

本研究では、彭(2012)の分類に従い、話者の認識を示す「覚得」「感覚」等を知覚動詞と捉え、分析する。

1.2 会話に見られる「我覚得」の分析

近年、実際の会話に生起する「覚得」を取り上げた研究もみられるようになった(Lim2009, Endo2010, 遠藤 2012)。Lim(2009)はアメリカ・カナダ在住の中国人同士の電話会話及び対面会話計7時間分の自然会話をデータとしている。Lim(2009)は、「我覚得」を話し手の認識を表明する「stance-taking」ととらえ、話し手が自らの認識に不確実さを表明することにより、聞き手の反論を予想した上での発話であるという話し手の認識を示す役割を果たすと指摘している。さらに、「我覚得」は共通の認識を引き出すために用いられる場合があると論じ、議論が起こる場面の会話に表れやすいという特徴を指摘している。

また、Endo(2010)は友人同士の対面会話をデータに「我覚得」を分析し、「我覚得」が用いられる場面は、相手と意見・評価が異なる場合が多く、反対の主張をする際の緩和表現として用いられると指摘している。「我覚得」を用いるのは、命題に対する確信度が低いからではなく、相手に反対の意見・評価を述べる際に相手への配慮を示すため、コンフリクトを緩和するためであるとしている。また、「我覚得」の生起箇所は、反対の評価的発話に先行して「我覚得」が用いられる場合もあれば、評価的発話の後に、その評価的発話をサポートする理由を述べる際に「我覚得」を用いる場合もあると指摘している。

さらに、遠藤(2012)は、認知言語学の観点から、非規範的な文法使用として節末部に出現する「我覚得」を取り上げている。データは在米中国人同士の会話と中国国内で収集した友人同士の会話計45時間分の対面会話である。遠藤(2012)は、対人的動機と認知的動機の2つの観点から分析し、認知的動機について、対立する意見の緩和、相手の領域に関する意見や強い主張の緩和としての働きを指摘している。遠藤(2012)は豊富な用例から分析及び考察をしている点で貴重な研究であるが、認知的動機で主張している対立意見の緩和や、相手の領域に関する意見や強い主張の緩和は、節末部に表れる「我覚得」の特徴か、モダリティ表現としての「覚得」全体に通じて言える機能か、さらに慎重な議論を要すると考える。

上記の自然会話をデータとした研究ではそれぞれの指摘に違いがみられるものの、意見表明をする際に、対立意見が表れる際に「我覚得」の使用がみられ、その役割は「対立意見の緩和」にあるという点では共通した結果がみられる。

1.3 知覚動詞「覚得」「感覚」の語意

上述の通り、中国語における認識性を示す動詞には「覚得(覚着)」「看」「感覚」「認

² Liu(2009)は中国語の会話における談話標識として、「我覚得」に言及している。母語話者間のインタビューの会話をデータに、計14の談話標識を認定し、そのうち「我覚得」使用頻度が上位から4位だと報告している。

為「相信」「想必」「想」が挙げられているが、研究によって取り上げられるものは異なっている。また、実際の会話をデータとして意見表明の際の「対人配慮」といった観点から分析されたものは「我觉得」のみである。しかし、実際に話し合いの場面を観察してみると、意見・評価を示す際に「感觉」もよく用いられることが観察される。「感觉」は形態及び意味が「觉得」に非常に近い。『現代漢語規範詞典』では、動詞「觉得」と「感觉」は以下のように説明されている（日本語訳は筆者による）。

觉得

①動詞 感觉到（～と感じる）

例：他昨天睡得太晚，今天觉得昏沉沉的。（彼は昨日寝るのが遅すぎて、今日ぼんやりしていると感じる。） / 觉得两腿发麻。（両足がしびれていると感じる。）

②動詞 认为（「認為」：～と思う）

例：我觉得你去比较合适。（私はあなたが行ったほうが良いと思う） / 我觉得这样不大好。（私はこれではあまり良くないと思う。）

感觉

①名詞（略）

②動詞 产生某种感觉；觉得。（ある種の感觉を持つ、「觉得」）

例：觉得疼痛（痛みを覚える） / 我觉得这篇文章有问题（この文章に問題があるように思う。）

『現代漢語規範詞典』の説明では、「觉得」と「感觉」の意味が非常に近いことがわかる。「觉得」①は「感觉」で説明している。一方で、動詞としての「感觉」は「觉得」で説明している。

また、「講談社中日辞典」では、動詞「觉得」と「感觉」は下記のように説明されている。

觉得

①感じる

例：觉得寂寞（寂しさを感じる）

今天我觉得有点儿不舒服。（今日私は少し体調がすぐれない。）

②～と思う、～と感じる

例：这幅画你觉得怎么样？（この絵をどう思いますか？）

我觉得这里应该再修改一下。（私はこここのところをもっと直したほうがよいと思う。）

感觉

①感じる、覚える

例：他感觉有点冷。（彼は少し寒く感じた。） / 感觉疼痛（痛みを覚える）

②～のように感じる、～の気がする、～と思う

例：我感觉他有点儿不高兴。（私は彼が少し不機嫌のように思う。）

ここでも、細かい相違があるものの、「觉得」と「感觉」は同じく「感じる」「と思う」といった訳語で説明され、両者の相違が明確ではない。

さらに、中国語の研究者及び学習者の間で最も権威のある文献と思われる「現代漢語八百詞」で調べると、「觉得」は、動詞「認為」の同義語であるが、語気が比較的軽いと説明されている。一方の「感觉」は収録されていない。

1.4 本研究の目的

以上の辞書及び文献の記述をまとめると、「覺得／感覺」はいずれもある感覚を持ち、意見・評価等を示す動詞で、「認為」より語気が軽いが、ほぼ同義であると言える。日本語訳も「感じる」「と思う」で共通している。しかし、中国語学習者にとって、この語気はなかなか理解しにくいものである。いつ、どのような場合なら、語気が軽い「覺得」が適切であるか。また語気が軽いもののなかでも、使い分けがあるのか、主張を緩和し、対人的配慮の役割を果たす「覺得」と同様に、「感覺」も同じ役割を果たすのかといった学習者の疑問に答えられるような研究は管見の限りまだない。実際の討論の場でこれらの表現が両方とも使われているのであれば、両者の機能には何らかの違いがあり、話し手はこれらの表現を使い分けて効果的に意見や評価を相手に伝えていると考えられる。そこで、本研究では意見・主張の相違がみられる話し合いの場面において、話者の意見表明の発話に「覺得」と「感覺」がどのように用いられるか、その機能を考察し、さらに両者の共通点と相違点を探る。その際に、「覺得」と「感覺」の説明に用いられる認識を示す「認為」も参考として分析した。

2. 研究方法

2.1 データ

本研究では、中国の某大学で収集した4人1組のグループ討論22組の録音・録画資料（計7時間20分）をデータとして用いた。グループの参加者は、友人関係にある大学生または大学院生であり、討論の課題は、20分以内に「中国で日本人大学生を案内する場所を一ヶ所選ぶ」ことである。各グループには、討論の課題の説明及び結果を記入するためのタスクシートを配布した。参加者の出身地は中国各地で、どこかひとつの地域に集中することはなかった。調査の目的は言語研究のための資料収集と伝え、討論の流れ等は、すべて参加者に任せた。データの収集者は討論開始後に退席し、20分たったところに討論の場に戻り、討論の結果を口頭で報告してもらった。

2.2 分析方法

まず文字化資料を作成し、「覺得」「感覺」³「認為」を含む発話を抽出した。次に1. 討論におけるこれらの知覚動詞の出現頻度はどのようなものか。2. 他の知覚動詞にも「我覺得」のような目的語節に後続して生起するものが見られるか。3. 主語の人称に違いが見られるか。4. 話し合いのプロセスにおける生起傾向に違いが見られるかという4つの観点から量的及び質的分析を行った。

3. 結果及び考察

3.1 出現頻度

出現頻度を分析した結果、「覺得」と「感覺」の生起数は、それぞれ490と125であり、

³ 「感覺」は名詞として用いられる場合もある。例えば、「因为那种好多建筑物嘛 你就是 就是后天改建的那种感觉, 都已经不是它的本身面目了」では、感覺は名詞として用いられる。本研究では、名詞として用いられる「感覺」を分析対象から除外した。

「認為」は5回しか生起しなかった（表1参照）。本研究のようなフォーマル度の低い話し合いの場では、意見表明の発話に「認為」が生起しにくいことが示唆された。

表1 「覺得」「感覺」「認為」の生起数

	覺得	感覺	認為
生起数	490	125	5

3.2 目的語節の位置

本研究のデータから、「覺得」と「感覺」の生起位置は、話し手の意見・評価に先行する場合と意見・評価に後続する場合がみられた。中国語の規範的な語順は「主語＋知覚動詞＋目的語」であり、意見・評価に後続して知覚動詞が用いられるのは、いわゆる非規範的な文である（遠藤2012）。一方で、「認為」には非規範的な使用がみられず、割り込みがあったため発話が完成できなかった1例を除けば、すべて「主語＋「認為」＋目的語」であった。ただし本研究では、生起数そのものが少ないため、「認為」については今後のさらなる研究が待たれる。以下では、覺得・感覺の生起箇所が意見・評価の内容に先行するものと後続するものそれぞれの発話例を示す。

会話例(1)と(2)は、「覺得」、「感覺」が意見・評価の内容に先行する例である。会話例(1)では、sは南京のサービス業の質が良くないことを「覺得」を用いて述べている。会話例(2)では、sが「麗江に行くことを勧めたい」という気持ちを「我感觉」を用いて述べている。

会話例(1) 「覺得」＋意見・評価

- 168 s 但是确实觉得南京的 服务行业很差
 169 g [我 我对南京的印象是
 171 g 自从见到了张老师改-改-改-

日本語訳

- 168 s しかし確かに思[う南京の サービス業はとても悪い
 169 g [私の南京に対する印象は
 171 g 張先生に会ってから 変わり-変わり-変わり-

会話例(2) 「感覺」＋意見・評価

- 84 s 我感觉我还是[推荐去那个丽江
 85 q [嗯： 丽江

日本語訳

- 84 s 私は思う私はやはり[麗江に行くことを勧めたい
 85 q [うん 麗江

会話例 (3) と (4) は、意見・評価の内容を述べた後、「我覺得」「感覚」を付加する例である。会話例 (3) では、p は南京よりも北京のほうがよりよいという主張をしており、発話の最後に「我覺得」を付加している (96)。「我覺得」の内容は、直前の「但他们了解北京」か、それとも冒頭の「他们不了解南京这样一个城市」からの 3 文を含むかは、判断するのは難しい。「我覺得」が後置される場合、話し手の態度しか表すことができず、命題を表すことができないという方 (2005) の指摘通り、ここでは、「我覺得」の付加により、96 の発話内容全般に対する話し手の態度が示されている。

会話例 (4) では、y は都会だったら、日本でも同じような経験をしているはずだということを主張した後、0.8 秒の間をおいて、小さく「感覚」を付け加えた (163)。ここでは、「感覚」の対象となる内容は、1 つの文のみであり、異なる解釈の余地が少ないが、0.8 秒の後の「感覚」は、96 の「我覺得」同様に命題との関わりがほとんどなくなり、もっぱら話し手の自らの主張に対する確信の度合いが極めて低いことを示しているだけである。

会話例 (3) 意見・評価+覺得

- 96 p 他们不了解南京这样一个城市 他们也不会有很多时间去接触南京
但他们了解北京我覺得
- 97 z 因为[它是首都
- 98 t [我以为他们-
- 99 p 因为因为因为北京这样一个城市他举办过奥运会

日本語訳

- 96 p 彼らは南京という街を知らないし、彼らには南京に触れる時間もそんな
にないはずですが、北京は知っていると思は思う
- 97 z それは[首都だから
- 98 t [私が彼らは - と思っていた
- 99 p それは それは それは北京はオリンピックを開催した都市だから

会話例 (4) 意見・評価+感觉

- 163 y 其实他们这些在日本 [他们东京那些城市的话 他们也应该也都会有相同
的那种经历 (0.8) ° 感觉°
- 164 j [也都:-
- 165 j 可能他们的情况还更严重些

日本語訳

- 163 y 実は彼らが日本にいて[東京等の都市にいたら 同じような経験をし
ていたはずだ (0.8) ° と思う°
- 164 j [も みな:-
- 165 j もしかしたら彼らの場合もっとひどいかもしれません

本研究の会話例を検討した結果、知覚動詞「觉得」「感觉」が規範的な語順で用いられ目的語節に先行する場合、非規範的な発話末に後置する場合に比べて意見・評価の内容がより明確に示されるが、「觉得」「感觉」の使用により、命題に対する話し手の態度、すなわちそれはあくまでも一個人の認識であるという話し手の態度が示されている点においては、目的語節の位置に関わらず共通している。また、意見・評価の内容に後続する場合、知覚動詞の目的語節の範囲が明確でなくなるという点については、知覚動詞の機能が発話全体に対する話し手の態度を示すのにとどまるという方（2005）の指摘に合致するものである。ただし、目的語節に先行する「觉得」「感觉」と語用標識としての目的語節に後続する「觉得」「感觉」の細かい相違までは今回の分析で十分に示されなかった。今後の研究課題としたい。

3.3 主語の人称

本研究では、主語の判定は下記のように定義する。

一人称は、動詞の前に「我」または複数形「我们」が見られるもの、及び主語が省略されているが、話し手自身の考えを述べるものを含む。

二人称は、動詞の前に「你」または複数形「你们」がみられるもの、及び主語が省略されているが、聞き手の考えを尋ねる発話を含む。ただし、形式が二人称であっても、実際には第三者の感じ方や考え方を述べるものは三人称に分類される。⁴

三人称は、「他」または複数形「他们」がみられるもの、及び第三者の感じ方、考え方を述べる発話を含む。

「觉得」「感觉」の主語の人称を分析した結果を表2に示す。表2をみれば、「觉得」「感觉」は共通して主語が一人称と思われるものが最も多いことが明らかになった。また、両者の相違点もみられた。「觉得」では、二人称と三人称の割合が拮抗しているが、「感觉」では、二人称は見られない。二人称の使用に「觉得」と「感觉」に違いがみられた。

表2 「觉得」「感觉」の主語の人称

	觉得	感觉
一人称	445 (91%)	115 (92%)
二人称	24 (5%)	0 (0%)
三人称	21 (4%)	10 (8%)
計	490 (100%)	125 (100%)

以下では実際の会話例を示しつつ、違いがみられた「觉得」と「感觉」の二人称の使用について考察していく。

⁴ 該当するのは、「觉得」「感觉」それぞれ1例ずつである。

「觉得」：鼓浪屿 你你进去就觉得厄：：

「感觉」：因为你来了南京必然要感觉 - 就是有点奇怪的感觉 可能会有点微妙的感觉

上記の2つの発話は、いずれも主語は形式上では、「あなたが〜と感じる」という二人称になっているが、実際に指しているのはそれぞれ「鼓浪屿に訪れる不特定の人」、「南京に訪問する日本人大学生」であり、第三者である。

「覺得」の主語が二人称の場合、1. 他の参加者に意見・考えを尋ねる「あなた（たち）はどう思うか」（15）⁵、2. 他の参加者の考え、意見を推測して述べる「あなた（たち）が～と思っているが…／あなた（たち）は～と思っているかもしれない」（5）、3. 反語的表現「あなた（たち）は～と思わないか」（4）の3種類がある。

ここでは、最も多く生じた質問文の例を見てみる。会話例（5）は意見が異なる相手に説明を求める例である。ここで、北京を勧める t は、南京を勧める p に「北京と比べ南京の長所はどこにあると思うの」と「覺得」を用いて質問している。

会話例（5）

- 93 t 然后你覺得南京比北京的优势在[哪里
94 p [就是说我觉得南京跟北京的优势坦白了说就是说 我可以- 因为大学生是他们是不 不了解南京的

日本語訳

- 93 t それで あなたは北京と比べて南京の長所は[どこにあると思うの
94 p [つまり 私が思うには
北京に比べて南京の長所 はっきりいって つまり 私が - 彼ら大学は南京のことを知らないから

しかし、「あなた（たち）はどう思う？」といった類の質問は、「感覺」を用いたものはみられない。意見や評価を示す場合、二人称で質問したり、他者の考え方を推測または代弁して述べたりする場合には「感覺」は生起しにくいことが明らかになった。ここから、「覺得」と比べ「感覺」は意見や評価の内容に対する確信度が低いことが推察される。内容に対する確信度が低く「ひょっとしてそういうことも考えられるだろう」というスタンスで認識を示すのは、自分の意見を会話の相手に押しつけないという配慮を示す役割を果たす。一方で、相手の認識を尋ねたり、相手の認識を推測して述べたりする場合に「感覺」を用いると、相手の認識が確信度の低いことを見積もって述べていることになり、相手への配慮を示すことにはならない。そのため、二人称に「感覺」が生起しにくいのではないだろうかと思われる。

3.4 話し合いのプロセスにおける「覺得」と「感覺」の生起傾向

本研究のデータは、あるテーマについて話し合ったうえで、結論を出すことが求められる話し合いの会話である。参加者間では意見の対立が予想され、自らの考えを伝えたり、他者の意見に賛同または否定的な意見を加えたりすることが求められる。3.1 では、量的分析の結果から、意見や評価を伝える際にもっとも多く用いられる知覚動詞は「覺得」で、ついでに多かったのは「感覺」であることが明らかになった。本節では、会話の質的分析を通して、話し合いのプロセスにおける「覺得」と「感覺」の異なる使用傾

⁵（ ）内の数字は該当数を示す。

向を考察する。

① 論点の導入における「覺得」の使用

「中国で日本人大学生を案内する場所を一ヶ所選ぶ」という課題は、すなわち中国の数々の都市や観光地から一つだけ選ぶという目的を、話し合いを通して達成することである。話し合いのプロセスはグループによって異なるが、ある場所の提案または考える視点の提示から話し合いが始まるということは共通している。分析の結果、話し合いのはじまりの発話においては、「覺得」が多く生起していることが明らかになった。

会話例(6)では、討論の冒頭で、wが「覺得」を用いてタスクシート⁶にあった2つの都市である西安と北京について意見を述べ始めた。しかしgが2で確認の質問をしたため、wの発話が中断する。討論の課題の確認の連鎖(2-4)が生起した後、wが6と8で場所選びの基準として、行ったことがあり、しかも比較的経験のあるところがよいと自分の考えを提示した。ここでは、wは自分の考えを提示すると同時に、討論を進めるのに必要な論点も提示している。このような話し合いの論点を導入する箇所において、「覺得」の使用が見られた。この断片においては、「覺得」を用いる発話は、話し手の意見を提示したと同時に、話し合いの論点の導入も行っている。

会話例(6)

- 1 w 那我覺得这个西安和北京-
2 g 一定得在这里边挑啊?
3 w 不是
4 z 不[是
5 c [不是 都有
→6 w 但是但是我覺得咱们是不是应该-
7 z 去自己[去过的地方hhhh
8 w [自己去过的地方比较有体会的那种

日本語訳

- 1 w じゃあ私が思うにはこの西安と北京は-
2 g ここから選ばなければならないの?
3 w いいえ
4 z いい[え
5 c [いいえ どれでも
→6 w でもでも私が思うには私たちは-
7 z 自分が[行ったことのあるところに行くhhhh
8 w [自分が行ったことのあるところ 比較的経験のあるような(ところ)

⁶ タスクシートでは中国の有名な観光地4か所を例示したが、それ以外でもどこでも良いと説明している。

②話し合いの流れの仕切りなおしにおける「覺得」の使用

会話例 (7) では、互いに説得できずに意見が分かれた場面である。137-140 では、意見が統一できずにさらに議論しなければならないことを参加者間で確認した。そこで、141 で g は「私が思うには」と場所を検討する際に考えなければならない具体的な問題点を提示している。

会話例 (7)

- 137 y 所以要讨论嘛 所以要讨论
138 l 所以一个人得说服其他3个人统一
139 g hh
140 y 让他们去[看什么？
→141 g [不是 我觉得嘛 因为我们确实是- 如果是发展成果方面 普遍来说还是很落后的
142 y 唉：？
143 g 这要承认的

日本語訳

- 137 y だから討論する必要があるだろう だから討論しなきゃ
138 l だから一人がほかの3人を説得して統一見解を出さなければ
139 g hh
140 y 彼らに何を[みせるか？
→141 g [いや 私が思うには 私たちは確かに- もし発展の成果についてであれば、一般的にまだまだ（日本より）遅れているのだが
142 y え：？
143 g これは認めなきゃならない

③目的語節の内容による「覺得」と「感覺」の使い分け

話し合いの場面において「覺得」と「感覺」の両方が生起する。しかし、それぞれが導く意見や評価の内容が会話においてどのように位置づけられているかを分析した結果、違いが見られた。

会話例 (8) では、w と s それぞれの発話に「覺得」と「感覺」がみられた。まず w が民間の交流に政治的な要素を持ち込むべきでないことを「覺得」を用いて述べ (89)、その理由について「南京に来たらおかしい感じがする」と説明している (91)。続いて s は「这个我觉得吧」(これは私が思うには) で長いターンを取り w の趣旨に賛同する発話をした。そのあと、焦点を南京の魅力の有無に転換し、あまり特色がないと述べた (96)。ここでは話し合いの焦点の切り替えには「覺得」がみられ、具体的にあまり特色がないという指摘は「感覺」を用いて提示している。この s の「但是我觉得南京的吧 如果作为- 南京作为一个目的地的话 这像有点- 感觉好像可能没多大的特色」は、入れ子構造となっており、「感覺」以下も「覺得」の目的語節 (二重下線部) に含まれる

と解釈されるだろう。

会話例(8)でみられた「觉得」と「感觉」の発話から、「觉得」が提示する内容は、考える際の視点等より大きな枠組みに関するもので、一方の「感觉」はより具体的で、個別の評価を提示する、という使い分けが示唆された。

会話例(8)

- 89 w 我觉得民间交流大家还是不要带政治这种东西
90 l 嗯
→91 w 因为你来了南京必然要感觉- 就是有点奇怪的感觉 可能会有点微妙的感觉
92 l 确实
93 w [然后
94 y [这个政治方面的 确实会有
95 w 对
→96 s 这个我觉得吧 他那个其实民间交流 这个政治方面考虑问题应该很少 没必要刻意的去那个把这些东西再提提- 再提起来 主要是交流吧 但是我觉得南京的吧 如果作为- 南京作为一个目的地的话 这像有点-厄 感觉好像可能没多大的特色
97 l 嗯

日本語訳

- 89 w 私が思うには民間の交流はこのような政治的な要素を持ちこまないほうが良い
90 l うん
→91 w というのは 南京に来れば必然的に感じる- つまり少しおかしい感じがする たぶん少し微妙な感じがする
92 l 確かに
93 w [それから
94 y [この政治的な面において確かにあるだろう
95 w そう
→96 s これは私が思うには このような民間の交流は実はこの政治の面についてあまり考えないはずだ わざとそのような問題を持ち- 持ちこむ必要はない 主に交流でしょう しかし 私が思うには 南京がね もし南京を案内地としたら これはなんか少し- ん：なんかあまり特色がないように思う
97 l うん

④まとめの発話に見られる「觉得」

本研究では、意見をまとめる際には「觉得」が用いられる傾向もみられた。会話例(9)は前掲の会話例(8)の続きである。南京を候補から外した後、112で1は杭州を

提案した。その提案に対して、yが113と116で賛同を示し、wは行ったことがないと自分の経験を述べたが、杭州に対しての評価は示していない。それに対して、lは「自然や文化の面では結構良い」と自らの提案をサポートする理由を説明し、最後に小声で「我感觉」と付け加えた(121)。そして同時発話ではじまった122と124、126でsは、みんなが杭州に行きたがる理由を述べている。4人それぞれが意見を述べたところ、lはsとyの先行発話と同じく「所以(だから)」を用いてターンを取り発話を開始した。「所以」は個別の「原因—結果」の結果部分を提示する接続詞であると同時に、話題を終結する談話標識としても用いられ(Liu2009)、ここでは、より大きな談話レベルでのまとめの発話を提示するという役割を果たす。127では、lは「所以我觉得」を用いて、先行発話と関連させつつ、それまでの討論全体の流れを整理するまとめの発話をしている。この会話例(10)の121と127では、話し手は、個々の事象に対する意見や評価を示す際には「我感觉」を用い、会話の流れを整理し、まとめる発話を提示する際には「我觉得」を用いるという使い分けが観察された。

会話例(9)

- 112 l 如果南京不算 其实杭州也还可以 我觉[得
 113 y [对 其实杭州蛮不错的
 114 l 确实是
 115 s [唉：
 →116 y [好多人去过杭州都觉得杭州的风景确实不错
 117 w [我
 118 s [杭州是那个 是-
 119 w 没没去过杭州
 120 y [杭州西湖那边确实
 →121 l [杭州 [就自然人文都还蛮[蛮不错的° 我感觉°
 →122 s [我也没去过 [但是 我觉得就因为没去过
 那个所以
 123 y 所以
 124 s 所以好奇心
 125 w hhhh
 126 s 人家都说好所以你要去
 →127 l 所以我觉得就是好像讨论下来好像北京比较综合 就是能代表中国的很多
 个面 [然后像那个 嗯 就是西藏和那个成都比较有中- 就是有[特色一点
 128 s [对
 129 y [特色一点
 130 l 对

日本語訳

- 112 l もし南京を候補からはずすなら 実は杭州が結構いいと私は思[う

- 113 y [そう
実は杭州は結構良いのよ
- 114 l 確かに
- 115 s [そう
- 116 y [杭州に行ったことのある人はみな杭州の風景が確かに良いと思っている
- 117 w [私
- 118 s [杭州はあれあれ-
- 119 w い行ったことがない
- 120 y [杭州の西湖あたりは確かに
- 121 l [杭州 [は自然や文化の面では結構[良い° と私は[思う°
- 122 s [私も行ったことがない [でも [私が思うには
行ったことがないからこそだから
- 123 y だから
- 124 s だから好奇心で
- 125 w hhhh
- 126 s 人が良いと言っているから行きたくなる
- 127 l だから私が思うには つまり討論してきてみえたのは、北京は総合的に
中国の様々な側面を代表することができるみたいで [それであの うん
チベットとあの成都是比較的中国的[特色がある
- 128 s [そう
- 129 y [特色がある
- 130 l そう

4. まとめ及び今後の課題

本稿では、グループ討論をデータに用いて、話し手の認識を示す際に用いる知覚動詞「覚得」「感覚」の機能を分析し、両者の機能の相違の解明を試みた。「覚得」「感覚」の生起頻度、目的語節の位置、主語の人称、話し合いのプロセスにおける生起の傾向という4つの観点から分析した結果、1. 認識や評価を示す際には「覚得」が最も多く用いられる、2. 目的語節に後続する現象は「覚得」「感覚」の両方ともにみられ、認識や評価の内容に対する確信度は「覚得」より「感覚」のほうが低い、3. 「感覚」は個別の事象に対する評価発話に多く用いられるが、「覚得」は話し合いにおいて論点を提示する発話や話し合いをまとめる発話など討論の展開を方向付ける発話においても用いられる、という3点が明らかになった。本研究によって、中国語学習者にとって、従来ひとまとまりに「語気が軽い」で説明されてきた認識や判断を示す動詞「覚得」「感覚」の使い分けにより具体的な指標を提示できた。

ただし、Lim(2009)や遠藤(2012)が指摘する相手と対立的な立場からの発話に「我覚得」が多く用いられるという点に関して、本研究では検証ができなかった。本研究のデータである多人数参加のグループ討論に4人の参加者がおり、ある意見がある参加者の先行発話に賛同するものであると同時に他の参加者の意見に対立する場合もよくあ

る。そのため、対立の有無については二者間の会話の分析が必要であり、今後の課題としたい。

さらに、今回は一人称「我」が用いられる場合と、話し手の認識でありながら「我」を用いずに「觉得」「感觉」のみを使用する場合は観察され、両者は認識の内容に対する確信度に違いがみられることが予想されるが、本稿ではその詳細な分析はできなかった。今後は、日常会話等異なる場面での会話も取り入れ、上述の今後の課題の解明に努めたいと思う。

付録 会話例で使用した記号

発話の前のローマ字 1 字母は発話者を示し、その前の数字は会話冒頭からのターンの通し番号である。→は注目してほしい発話を示す。その他の記号は以下の通りである。

- h 笑い等吐息を示す。h の数は笑い等の長さを示す。
- () 中の数字は沈黙の長さ (秒) を示し、中の文字は非言語行動または日本語訳でわかりやすくするために補った訳を示す。
- [重なりを示す。
- 固有名詞等参加者のプライバシーに関わるものまたは発話を示す。
- ? 疑問文の構文であることまたは上昇イントネーションを示す。
- : 音の引き伸ばしを示す。「:」の数は音の相対的長さを示す。
- ° ° 囲まれた発話の音量が小さいことを示す。
- 中途発話であることを示す。

参考文献

- 井上優 (2012) モダリティの対照研究—日本語と中国語を例に—『ひつじ意味論講座 モダリティ II : 事例研究』ひつじ書房, 195-213.
- 于康 (1999) 現代中国語の命題構造の階層性『言語と文化』2, 11-27.
- 遠藤智子 (2012) 非規範的な文法使用の対人的・認知的動機—現代中国語会話における節末部我觉得を例に—『認知言語学論考 10』ひつじ書房, 247-297.
- 彭国躍 (2012) 中国語モダリティの機能—Palmer モデル適用の試み『モダリティと言語教育』ひつじ書房, 63-80.
- 方梅 (2005) 论证义谓宾动词的虚化—从谓宾动词到语用标记『中国语文』6, 495-507.
- 吕叔湘 (1994) 『现代汉语八百词』, 商务印书馆.
- Lim, Ni-Eng(2009) Stance-taking with Wo jue de in conversational Chinese. In Yun Xiao(ed.), *Proceedings of the 21th North American Conference on Chinese Linguistics, Volume 2*, Smithfield, Rhode Island: Bryant University, 323-340.
- Liu, Binmei(2009) Chinese Discourse Markers in Oral Speech of Mainland Mandarin Speakers In Yun Xiao(ed.), *Proceedings of the 21th North American Conference on Chinese Linguistics, Volume 2*, 358-374
- Endo, Tomoko(2010) Epistemic stance marker as a disagreement preface: Wo jue de 'I feel/

think' in Mandarin conversation in response to assessments 京都大学言語学研究 29, 43-76.

辞書

「現代漢語規範詞典」外語教学与研究出版社・語文出版社 2004 年第 1 版発行.

「講談社中日辞典第二版」1998 年第 1 版発行, 2002 年第 2 版発行.

(2013 年 6 月 14 日受理)

